

むというわけには、いきにくいだろう。しかしもし、そういうことができるようにでもなれば、そして、所定の情報をもつ核酸を、テープの指令か何かによって試験管内で合成できるようにでもなれば、図書館の文献複写室は、生化学的合成室となり、“閲覧室”は、情報物質を注射してもらおうという実利派のひしめく部屋と、読書のだいご味にひたろうという静修派のための快適な部屋とに分かれることであろう。——いやはや、過ぎた屠蘇がだいぶまわってしまったようである。

(理学部長)

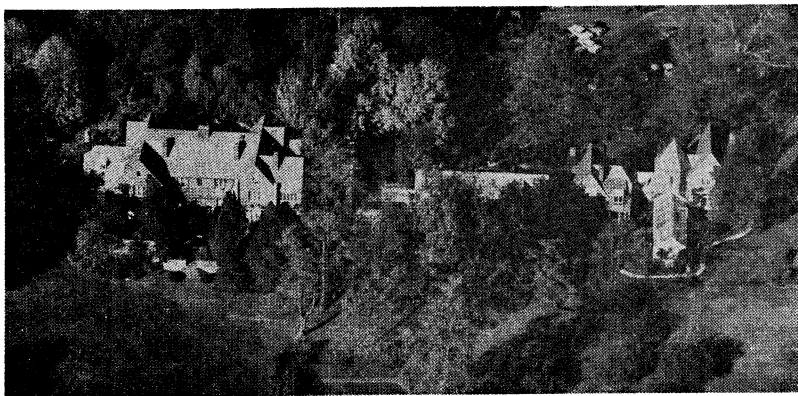
諸外国の研究所図書室(I)

占 部 実

私はここ10年ばかりの間に、欧米の研究所に勤務したり、共産圏諸国の研究所を訪問したりしたので、ここにこれら研究所の図書室の模様を思い出しながら述べてみようと思う。

私の専門は応用数学なので、話も自然その方面のことに限られてしまうが、この点は予めご了承ください。

私が最初に勤務したのは、米国の Baltimore にある Martin という航空機製作会社の研究所で、Research Institute for Advanced Study, 略して RIAS と呼ばれている研究所であった。この研究所は1955年会社の基礎研究所として創設され、数学部門は1958年 S. Lefschetz の尽力によってつくられた。私が勤務したのは1959～1960年であるが、数学部門では主として非線形振動、自動制御の理論的研究が行なわれていて、S. Lefschetz の指導の下に、専任所員の J. LaSalle, R. Kalman, J. Hale などが中心となって活躍していた。数学部門では所員は全部で30名位であったが、半数が専任で半数は客員所員であった。建物は Baltimore 郊外の個人の家を買収したもので、到るところにバスルームがあったり、広い庭園があったりして、全くアトホームな雰囲気をもっていた。私が勤務していた当時は、アメリカでも冷房設備はまだそれほど多くなかったのだが、研究所だけは各室とも冷房装置がついていたので、ときどき来る Johns Hopkins 大学の連中は研究所を非常に羨ましがっていた。



研究所の図書室は可成りの蔵書をもっており、とくに雑誌類はよく整っていた。数学部門は新設されて間がないのに、バックナンバーもよく揃って

いた。感心したのは、図書室がつねに整理されていることであった。わが国の図書室では未整理の図書が書庫の隅にうず高く積んであるのをよく見掛けるのだが、このようなことはここでは一度も見たことはなかった。図書室には専門の司書のもとに、数人の職員がいただけであるが、多忙なときにはパートタイムの人を雇ってでも早々と片付けていたようである。しかし職員個人個人の仕事の要領も日本とは相当に違うように見受けられた。

図書室のサービスでとくに感心したことは、他の図書館との連絡が実によくとれていることであった。研究所の図書室にない文献を見たいときには、この旨申出ると、図書室から他の図書館に連絡して数日のうちにその文献を届けてくれ、また複写したものが欲しいときにはその旨申出れば、複写したコピーを直ぐ届けてくれた。ゼロックスはまだできていなかったなのでコピーにはいろんなものがあったが、ともかくこうしたことによって、研究所が自分で図書を網羅的に集める必要はなく、図書に関する限り、限られた予算、限られた建物でも研究に支障は来さないようになっていた。図書館相互の連絡を緊密にして相互に融通し合うことは、出版物の急増している現在、わが国でも最も重要なことではないだろうか。

つぎに私が勤務したのは、米国の Madison にある Wisconsin 大学 付置の研究所で、Mathematics Research Center, 略して MRC と呼ばれている研究所であった。この研究所は R. Langer の尽力によって創設されたもので、応用数学の研究を主としている研究所である。所員は全体で40~50名位であったが、専任所員はごく少数で、大部分は1年契約の客員所員であった。私はここに、1960年と1963~1964年と2回にわたって勤務した。最近の研究テーマを年毎に定め、そのテーマを中心にして客員所員を集めているようである。研究所は大学構内にあり、建物は数学教室、物理学教室とつながっていて、図書室は数学教室、物理学教室と共用になっていた。この図書室の蔵書数やその内容はわが国のそれと大した変りはなかった。

話が脱線するが、ここで Wisconsin 大学の中央図書館のことを少し述べておこう。中央図書館は莫大な蔵書をもっており、全学的なものはすべてここに保管されている。中央図書館には世界各国の主な新聞がすべてとってあったので、私は新聞を読みによくこの図書館に通った。世界各国の新聞を比較すると、日本の新聞では記事の扱いが一方的であったり、また書いた記事に対して無責任であったりするのが目立ち、どうも日本のジャーナリズムは病気がかかっているのではないかと思うことがよくあった。中央図書館は全館冷暖房になっているので、友人の工学部教授は答案の採点をしに図書館によく行っていた（教室の方は冷房施設がしてない）。とにかく中央図書館は大学の中では、きわめて気持のよいところであった。

欲しい文献が、大学内のどこの図書室にあるかを知りたいときは、近くの数学の図書室に行けばすぐ教えてくれるが、この間の事情はわが国のそれとほとんど変りはなかった。ただ大学内にないものについては、研究所のセクレタリーが中央図書館に連絡してくれ、他の図書館からすぐとり寄せてくれるので、非常に便利であった。

RIAS でも MRC でも所員の研究成果は Technical Reports として印刷され、関係方面に配布されている。しかしこの Technical Reports のタイプ、印刷、配布はすべて研究所のセクレタリーの仕事で、図書室は残ったものをただ保管しているだけであった。（つづく）

（数理解析研究所教授）